第 57 回多摩川流域セミナー　開催報告

「コロナ禍と水辺での遊び・学び」

第 57 回多摩川流域セミナー　開催報告（詳細版）

目　次

1. 開催概要 1

2. 午前の部・現地視察（きぬたまあそび村） 2

2.1 きぬたまあそび村について 2

2.2 令和元年東日本台風の被害と復旧について 2

3. 午後の部・開会挨拶（神谷氏） 3

4. きぬたまあそび村の紹介：コロナ禍での再建（上原幸子氏） 4

5. リレートーク：コロナ禍での活動紹介 5

5.1 ①上流部（柴田大吾氏） 5

5.2 ②上流部（渡部賢二氏） 6

5.3 ③中流部（上原幸子氏） 7

5.4 ④下流部（野沢聡子氏・岡本浩子氏） 8

6. トークセッション：今だからこそできること 9

6.1 トークセッション概要 9

6.2 トークセッション詳細 9

6.2.1 寺田氏自己紹介 9

6.2.2 意見交換 10

7. 閉会挨拶（京浜河川事務所 櫛原氏） 18

1.　開催概要

日　程：令和 4 年 11 月 26 日　午前の部 11:00～12：00　午後の部 13:20～15:30

形　式：午前の部：現地見学（きぬたまあそび村）

　　午後の部：鎌田区民センター/オンライン開催（ZOOM）

主　催：多摩川流域懇談会

登壇者：

　柴田大吾氏（御岳カップ実行委員会）

　渡部賢二氏（福生水辺の楽校）

　上原幸子氏（NPO 法人砧・多摩川あそび村）

　野沢聡子氏・岡本浩子氏（多摩川とびはぜ倶楽部）

　寺田光成氏（高崎経済大学地域政策学部）

　佐山公一氏（多摩川流域懇談会運営委員）

　神谷 博氏（多摩川流域懇談会運営委員長）

参加者：午前の部　19 名

　　午後の部　51 名（会場参加 30 名、ZOOM 参加 21 名））

2.　午前の部・現地視察（きぬたまあそび村）

多摩川流域懇談会運営委員長の神谷氏より、開会の挨拶の説明があり、現地見学がスタートしました。見学時には、NPO 法人砧・多摩川あそび村の上原氏に解説いただきました。また、多摩川を管理する京浜河川事務所調査課の寺西課長から、令和元年台風 19 号による被災とその後の治水対策について説明がありました。

2.1　きぬたまあそび村について

上原氏

＜主な内容＞

- 平日は人がいないので遊びに行ってはダメと言われていた多摩川河川敷に遊び場をつくり、今では、世田谷区から委託され、プレイワーカーが常駐するようになった。
- ベンチ、井戸、ツリーハウスなど子どもも一緒に相談してつくっている。近くにはツバメのねぐらもあり、普通はなかなか出会えない豊かな自然に出会うことができる。

2.2　令和元年東日本台風の被害と復旧について

寺西氏

＜主な内容＞

- 多摩川流域全体に強い雨が降り、計画高水位を上回る箇所があった。対策として、緊急治水対策プロジェクト（大丸用水堰の改築、堤防整備、河道掘削など）を進めている。さらに気候変動による大雨に対応するため、河川整備計画の上位にある河川整備基本方針の見直しを進めている。
- また、流域のあらゆる関係者と連携して行う流域治水にも取り組んでいる。

3.　午後の部・開会挨拶（神谷氏）

神谷氏より、開会の挨拶およびセミナー主催の「多摩川流域懇談会」についての説明があり、第 57 回多摩川流域セミナーが開会されました。

＜主な内容＞

- 多摩川流域懇談会は、多摩川に関わる全ての主体が集まって緩やかな合意形成の場を作っていくという仕組みである。
- 最初に取り組んだことはパートナーシップで取り組む場づくりである。第 1 回セミナーが 1999 年で、今回は第 57 回になる。年 2～3 回ずつ開催している。
- 多摩川は、市民団体が非常にたくさんあり、活発に活動している。今日は上流から下流までいろいろな団体の方に来ていただいてお話をしていただく。
- 直近のセミナーではいろいろなテーマを取り扱ってきたが、コロナも大きな影響を受けてきた。フィールドが復活できたということで、本セミナーが開かれることになった。

4.　きぬたまあそび村の紹介：コロナ禍での再建（上原幸子氏）

上原氏

午前に見学した「きぬたまあそび村」の遊び場づくりの整備を上原氏に紹介いただきました。

＜主な内容＞

- きぬたまあそび村は、茅の採取場が整備されずに残ったということ、旧堤防（霞堤）で大水から守られた在来種が生息しているということが特色としてある場所である。
- 地域の子どもが自然と触れ合う遊び場を作りたいということで、多摩川周辺の小学校の PTA が中心になって 1999 年にきぬたまあそび村を始めた。地域の小学校やいろいろな団体の方に協力いただき、水辺の楽校が立ち上がった。
- みんなで協力して作っていくということ、時間をかけて作っていくということをやりたくて、参加型の「子どもが自然と触れ合う遊び場づくり」を始めた。
- 自然の中で滞留する時間を増やすなら座る場所が必要ということで、野川で切られた樹木をもらい、近隣の砧南小学校のパパースクラブの協力でベンチを作った。多摩川の源流からもらった間伐材を子どもたちと樹皮を剝いでベンチを作ったこともある。
- 当団体の副代表のご主人がタイル職人だったことから、子どもたちがデザインするタイル絵ワークショップを実施し、遊べる井戸を作った。子どもが遊んだ水はそのまま地面に浸透するのでなく、水路をとおってトンボ池ビオトープに流れ、生き物のすみかを作り出している。
- 年 1 回の冬場の草刈りは世田谷区が実施しているが、それまでの草刈りは自分たちでやっている。草刈りを生かして草のトンネルや迷路、虫の寝床づくり、外来種を使った草木染めなどを行っており、参加型の草刈りが豊かな発想を生むことを実感できている。
- 樹の上に秘密基地を作りたいというところから、多摩美術大学の学生と子どもたちが協力して地域の竹を使った秘密基地「ツリーハウス」の作成に取り組んだ。
- このような遊び場の形ができており、助成金での整備やツリーハウスも木に負担をかけないように間伐材を使って作り変えている。
- 2019 年の台風で被災したが、地域の皆さんで遊び場の復旧作業を行い、溜まった沢山の土砂を地元の建設会社さんによる重機提供と 7 名のボランティアの協力で撤去した。このときに「うちの子がお世話になった」と言われたことが心に残っている。その後、コロナをきっかけにこのツリーハウスづくりの再建企画を子どもたちと一緒に行った。

5.　リレートーク：コロナ禍での活動紹介

5.1　①上流部（柴田大吾氏）

多摩川上流部・御岳渓谷エリアでのリバークリーン活動について、柴田氏にご紹介いただきました。

＜主な内容＞

1. 多摩川上流部・御岳渓谷エリアについて

・　自然が豊かで、電車や車のアクセスもいい場所である。年間通して安定した水位があるのでリバーアクティビティーの競技が盛んである。ゴールデンウイークから 10 月末までに約 5 万人弱の方が多摩川御岳渓谷を中心にラフティングの体験に来ている。

2. コロナ禍での活動について

・　コロナの最初の年である 2020 年は緊急事態宣言が出て、東京都から出ないようにということで、奥多摩や御岳渓谷がテレビで多く扱われた。その効果があり、多くの方に遊びに来ていただいた。

・　「クラスメイトのマスクを外した顔をはじめて見た」、「コロナ禍で一番笑った」というコメントをいただき、改めて自然の中で水遊びをすることの大切さを感じた。

3. リバークリーン活動について

・　美しい御岳渓谷だが、川に落ちているごみが大きな問題となっている。

・　2019 年 11 月に御岳カップというアウトドアスポーツの大会を開催する予定であったが、2019 年 10 月の台風 19 号により開催できる状況ではなかったため、種目を変更してリバークリーンという川の清掃活動を行った。2 日間で 300 名の参加者が集まった。ここからリバークリーン活動が始まった。

・　2022 年 11 月に川ごみを拾いながら総重量で順位を競うイベントを開催した。拾ったごみは青梅市のリサイクルセンターに持ち込み、適切に処理をしていただいている。

・　活動をしている中で、リバークリーンでごみを拾うということに加えて、教育するということも必要だと感じ、「Leave No Trace」というアメリカ発祥のアウトドアの環境倫理のプログラムを御岳渓谷だけではなく、秋川や奥多摩、釜の淵公園を中心に活動している仲間と一緒に発信していく取組をしている。

・　たくさんの方が御岳渓谷に来られて、いろいろな輪がつながった。多摩川は御岳渓谷から海まで 70km あるため、少しずつ活動するエリアを下流に移していきたいと思っている。

5.2　②上流部（渡部賢二氏）

渡部氏

御岳から下流に 20km ほど下った福生にある「福生水辺の楽校」を、渡部氏にご紹介いただきました。

＜主な内容＞

1. 福生水辺の楽校について

・　福生水辺の楽校は、2004 年に開校して今年で 19 年目を迎える。「多摩川で遊ぼう」ということを合い言葉に毎月第 2 日曜日の午前中を基本に、バードウォッチングやガサガサ、ピストン釣りなどを開催している。参加者は毎回 20～100 名で、年代は小学校低学年や児童の方から子どもに付き添う保護者の方までいる。

2.コロナ禍での活動について

・　コロナの影響で活動回数は大幅に減った。雨天の場合、京浜河川事務所の裏側にある川の志民館を借りて活動していたが、コロナの影響で利用できなくなり、雨天時のプログラムができなくなった。

・　活動減少に伴い、YouTube チャンネルを開設した。NPO 法人 自然環境アカデミーの野村氏が、冬の多摩川（福生）の鳥を紹介している。

3.他地域との交流について

・　毎年 8 月に大師水辺の楽校にお邪魔している。川崎から福生へということで、川崎市「水たまキッズ」の方たちを招いて交流することもある。

・　福生から直線距離で 42km の川崎は、福生と比べると環境がまるで違う。ラフティングをやっている御岳渓谷は岩ごつごつしており、福生の辺りは岩の玉石がごろごろしている。川崎の干潟に行くと砂地になってくるので、多摩川でもこんなに違うのかと驚いている。

5.3　③中流部（上原幸子氏）

上原氏

きぬたまあそび村のソフト面に焦点を当てて「コロナ禍で再認識した多摩川の居場所の大切さ」について、上原氏にご紹介いただきました。

＜主な内容＞

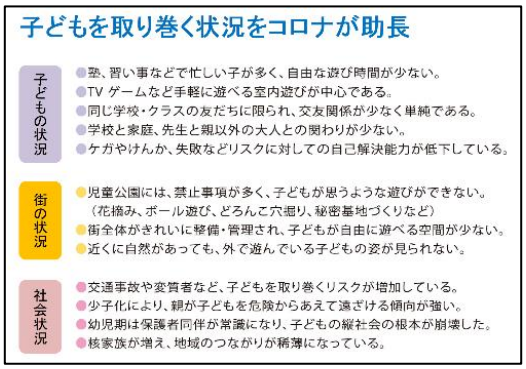
1. きぬたまあそび村について

・　きぬたまあそび村の活動を始めた頃、子どもたちには「三間（時間、空間、仲間）」とがないことが問題になっていた。そこで、地域の親たちが中心となって、遊び場をつくった。

・　活動を始めてから 8 年の頃に、世田谷区の自然体験遊び場事業を受託した。子どもの居場所づくりと大人の出番づくりということを意識しながらきぬたまあそび村の活動をやっている。

・　現在は、月水金土と隔週の日曜日にやっており、いつでもプレイワーカーというスタッフがいて、子どもが 1 人でも遊びに来られる場所として活動をしている。

・　子どもが育つ環境に必要な 3 つの要素である遊ぶこと、学ぶこと、つながることを意識するということを皆さんと共有できればと思っている。



2. 活動状況について

・　危険なことも含めて体験から学ぶ最たるものが川遊びだと思っている。体験しないと分からないこと、体験から学ぶということを目的にした活動が重要であるが、コロナ禍でどんどん減ってきている。

・　川での活動の際はライフジャケットを着るなど、どういう遊び方をすれば安全かを子どもも親も理解しながら、多摩川について知ってもらうということを大切にしたいと思っている。

・　実際に放課後に遊びに来る子はまだ少ない。コロナ禍で学校に行かない子どもが増えており、低年齢化しているという状況が見受けられている。

・　遊び場で大事なのは、いろいろな人と出会うことである。そこで、コロナ禍で切れてしまった多様な団体とのつながりをつなぎ直すイベントを企画している。

・　子どもたちに豊かな自然体験と安心できる居場所をつくるという活動の中で、コロナが終わったら、さまざまな体験をして子ども時代の色あせることない記憶を大切にしてくれることを心から願っている。

5.4　④下流部（野沢聡子氏・岡本浩子氏）

野沢氏

岡本氏

多摩川の河口部で活動されている多摩川とびはぜ倶楽部の野沢氏、岡本氏に「コロナ禍での羽田水辺の楽校の活動状況」についてご紹介いただきました。

＜主な内容＞

1. 多摩川とびはぜ倶楽部について

・　主な活動は、干潟の観察会や野鳥観察会といった定例観察会、授業支援やサマースクールといった地域の小学校の支援、清掃活動といった多摩川の自然を守る活動の 3 つである。

2. コロナ禍での活動について

・　コロナ禍においても、基本的に通常どおり活動ができるように努めていた。通常どおりの活動ができないときは、有志で台風 19 号によって運ばれてきたごみの収集活動を実施した。

・　授業支援について、2020 年度は緊急事態宣言による休校等があり、1 学期はほとんど依頼がなかったが、9 月、10 月には依頼が集中して、保育園からの依頼や遠足を兼ねた午前から午後にまたがるような長時間の活動があった。2021 年は緊急事態宣言時も屋内での事前授業はできたが、7 月以降はまん延防止等重点措置で、河川の一時使用許可が下りなくなり、9 月までは屋外活動の支援は全て中止になった。

・　サマースクールについては、2020 年度は例年をはるかに上回る参加希望があった。2021 年度は台風と緊急事態宣言の影響で夏のサマースクールは実施できなかったが、強い要望があり 10 月に 1 校開催した。地元の自然での活動に対するニーズの高まりを感じている。

・　多摩川の自然を守る活動について、活動場所である大師橋干潟は豊かな自然が残っているが、大量のごみに悩まされている。感染症対策で観察会ができないときも有志でごみを集め、集まったごみは京浜河川事務所と大田区の協力のもと処分していただいた。

	干潟の観察会	セミの羽化観察会	ガサガサ体験(水中の生き物観察)
2020年度	8/2午前中実施(96名)	8/2夜実施(50名)	感染症対策と猛暑のため中止※
2021年度	雨天中止	雨天中止	緊急事態宣言のため中止
2022年度	7/24実施(38名当選)	7/31実施(40名当選)	雨天中止(32名当選)

3.ネットワークでつながった仲間との交流について

・　エコロジカルデモクラシー財団にお誘いいただき、多摩川オンラインシンポジウムに参加したことをきっかけに、かわさき水辺の楽校との交流が始まった。お互いの水辺の楽校を訪問して一緒に活動することで、それぞれの楽校のいいところを認識することができた。今後は合同でのイベントを計画して楽しい活動をしていきたいと思っている。

・　2020 年度を羽田ふるさと再生プロジェクト元年と位置付け、町会の方々を巻き込んでごみ拾いを続けている。将来的には羽田地区の多摩川河川敷の緑道を多くの人々が散策できるようなものを見据えている。

6.　トークセッション：今だからこそできること

6.1　トークセッション概要

寺田先生

セミナーの後半では、リレートークの 5 名の講演者にコーディネーターとして佐山氏、コメンテーターとして寺田氏を迎え、トークセッションを行いました。

佐山氏から「リレートークでは、子どもたちの体験につながるいろいろお話をいただいた。コロナ禍での遊び・学びというテーマの中で、「体験」というものが多く出てきたかと思う。もう一度お伝えしたいことを中心に意見交換ができればと思う。」とのコメントから始まり、それぞれの講演内容に関する意見交換や、視聴者からの質疑応答が行われました。

最後に、寺田氏から以下のまとめをいただき、トークセッションを終了しました。

「つながりができると子どもたちの学びも広がるだろう。川という場所は、楽しさを感じ取ることができる場所であり、皆さんはそういった場所と子どもたちを繋げる役割を担っていると思った。大人が場と繋がることで、子どもたちの学びの場も広がると思う。レイチェル・カーソンは、知ることより感じることが大切であると語っている。感じとることができる場をつくるためには、もっと繋がりを持ち、大人たちが広げていくことが大切だと思う。」

6.2　トークセッション詳細

6.2.1　寺田氏自己紹介

- 現在高崎経済大学地域政策学部の助教をしており、冒険遊び場づくりという活動の研究員なども務めている。
- 「なぜ公園は全然アップデートされないの」という子どもたちの言葉がある。「ゲームだったらバグがすぐに直ったり、新しいステージが出たり、イベントが出たりする。なぜ公園は何にも変わらないのか」という問いかけであった。子どもたちの中で初めて行う「釣り」は「どうぶつの森」、「秘密基地づくり」は「フォートナイト」と、ゲームの中で行われる。実際に一緒に秘密基地づくりに参加したが、「木を持つのが重い」「面倒くさい」「ゲームだとボタンを押すと 5 秒ぐらいで木が切れる。しかし、実際に木を切るのはもっと時間がかかる」と折れてしまう子が何人かいたことがあった。
- 秘密基地遊びや川での遊びは、子どもの遊び場として定められていない場所での遊びであることがある。川というのは明確に遊んでいいと言われている場所ではないところが多い。大人たちは、「そこは遊ばないほうがいい」「学校や行政が駄目と言っている」と役割分担が不足している中で、改めて公園だけではなくて、より多くの場所が遊び場として機能できるようにするにはどうしたらよいか、公園以外の空間を遊び場として捉えていくというアップデートができればと思い、見直している。
- 遊び場のアップデートを考えている背景としては、自殺者数や不登校者数、精神的幸福度が日本で大変低くなっていることがある。水辺での活動はこうしたところにアプローチできるということをお話ししていきたいと思う。

6.2.2　意見交換

(1)　各リレートークの補足

〇岡本氏

・　子どもたちが屋外での活動ができないことが続いた後、干潟に来ると、歓声を上げて喜び、すごく生き生きと発言している姿がたくさん見られて、先生方も喜んでいた。
・　ごみが多い状況であり、来た子どもがあまりの汚さに「地獄だ」と言った。干潟をきれいにし、皆さんが心から喜んで楽しく体験できるようにしたいと思っている。

〇野沢氏

・　小さなカニが怖くて触れない子も結構いるので、どうしたものかと悩んでいる。
・　落ちているごみの例として、フライパンの柄が多い。フライパンは金物として集めて売っている。
・　学校支援は平日行われるが、平日に動ける者が 2 人ほどしかいないので、大変な思いをしている。
・　事前授業は、パワーポイントを見せて事前授業をしてから、別な日に現場に連れていくという 2 部制になっている。子どもたちは最近、環境問題にとても関心を持っているので、「プラスチックのごみが流れると、魚がクラゲと間違えて食べてしまう」と話すと、子どもは「お母さんにそれを言わないと」ということで、やりがいがある。

〇上原氏

・　コロナで困っているのは、いろいろな団体との活動のつながりが寸断されてしまっていることである。つながりを再生していくことを考えている。
・　子どもにとって地域の大人がいろいろな形でつながりが見える、顔が見える関係ができるというのは学校以外の場所でしかあり得ないので、その辺りを検討していきたい。

〇渡部氏

・　コロナになっていろいろ変わったことがある。その 1 つに、遅刻した参加者は遠慮いただくというルールがある。先に集まってきている参加者の迷惑になるということで今年度は強化している。
・　困っていることは、若い親の方で、参加はしているがスタッフの言うことを聞かない方がいることである。水に入る活動をする際、最初の挨拶や注意事項を徹底している。安全に楽しく帰ってもらうために開催しているので、今後も継続していきたいと思っている。

○柴田氏

・　川の活動は水が冷たい、水の中に入ったら息ができないという当たり前のことを水に触れる、感じることで共有できるということは、子どもたちだけではなく大人にとってもすごく大切なことだと感じた。

・　多摩川は、水干というところから羽田空港のところまで 138km 流れていて、今年、立川市の中学 2 年生の子どもたちと人力で多摩川を源流の水干から羽田空港まで下り、山から川が流れて海まで行くことを実体験として見て感じられた。子どもたちにとって自信を持てる体験になったと思う。自分にとっても貴重な出来事であった。

○寺田氏

・　コロナでルールが変わり、これまで身についてきた文化を一回立ち止まって考えなければならないときが来たと思う。良し悪しに関して、捉え方はメンバーによって異なってくるが、ここから新たなものを作り出すときが来ており、今いる人たちと何らかの解を一緒に作っていくようなプロセスが求められている。その中で一体どういった部分をこれから楽しく作っていくことができるのか、この後聞いてみたい。

(2)　コロナ禍で感じたこと

○佐山氏

・　コロナ禍でルールが変わった。とびはぜ倶楽部も多摩川のオンラインシンポジウムに参加していろいろな方とつながったり、御岳の柴田氏も川ごみネットワークの中で話をしたのがきっかけで今回登壇していただいたりしている。いろいろなことが変わって、それに合わせて自分たちが変えていくということがあったかと思う。

・　何が変わって、どういったところをこれから変えていく、自分たちのこういったところをもっと変えていきたいなどコロナ禍で変わってしまったことで自分たちがどのように思っているかをお話しいただきたい。

○岡本氏

・　いろいろな方がインターネットを介してオンラインでつながるということができたので、活動の幅が広がった。本セミナーも多摩川ネットワークから習って来させていただいたり、エコデモ財団の方から声をかけていただいたり、いろいろなつながりが増えた。

・　「ごみをたくさん集めたが、処分はどうしよう」ということを毎年繰り返していたが、今はどうしたらいいかをいろいろな方に相談することができているので、うまく処分している方の体験談をたくさん頂いてうまく進められるようになりたい。

○野沢氏

・　最初にエコデモ財団から誘われて上流から下流まで通じて体験したときに初めて目が開いたという感じだった。それがいいきっかけになったので、これからもつながりを広げていく中で自分たちがどうやって変えていけばいいかが見えてくるのではないかと思う。

○佐山氏

・　相談ができるようになったというのは 1 つ大きな点かと思う。自分たちでどうにか解決しようと思い、会の中で話をしていても解決策が見つからなかったが、部外者の人たちの例をもとにどのように変えていったらいいのかを相談できるようになったことは大きな進展かと思う。
・　コロナが起きる前はそういう発想はなかったと話があったが、なぜか。

○岡本氏

・　私たちは 16 名で活動しており、授業支援月 10 回の他に定例観察会がある。
・　授業支援をするためには、打合せも必要で月 10 回以上の活動がある。それをボランティアでやっているため手一杯で、そこまで目が向かなかった。目を向けてみると、すごく大きなヒントがたくさんあるということに気づかされたので、時間を工面して頑張っている。

○上原氏

・　上下流のつながりがオンラインでできるようになっていると思う。
・　ツリーハウスを作ることになったきっかけは、コロナできぬたまあそび村が閉鎖になったときに、常連の子たちはどうしているかということでプレイワーカーがオンラインで子どもたちと話をしたところ、ツリーハウスを再建したいという子どもたちの意見が出てきたことである。
・　普段は一人一人に聞けないようなことが、オンラインでつながることで一人一人と意見交換ができると感じた。閉塞された状態だったからこそ頑張ろうとできたことなので、コロナのおかげかと思う。

○佐山委員

・　ツリーハウスに使った木は上流の木材なのか。

○上原氏

・　上流の木材を使用した。ウッドクリエーターをやっている方から奥多摩の山主の方をご紹介・協力いただき、子どもたちと間伐体験をしに行くということが可能になった。

○佐山氏

・　本セミナーのキーワードの 1 つである「つながる」ということで、実際に上流に行って木を調達し、下流のきぬたまあそび村で活用している。どこで材料を調達したらいいのかわからないなど、何か困った場合は上原さん経由で上流に相談されてみてはいかがか。この場もつながる場の 1 つであると思っていただければうれしい。

○渡部氏

・　福生水辺の楽校は以前より佐川氏が担当している大師水辺の楽校と交流を持っている。他にも、水辺の楽校同士でのつながりがある。
・　つながりということで、コロナになって事務局と今後のことを相談した。これまで終了時には「お疲れさま」で終わっていたが、集まって反省会をするようになった。
・　今年の簡単釣り体験は多摩川を管理している秋川漁協さんにも協力いただき、おかげで参加者が増えた。
・　自然科学アカデミーは顔が広いのでつながりで困っているということはない。逆に発信していくということで、昨年から YouTube を開設している。

○佐山氏

・　コロナ禍で発信の方法が変わったということが大きな変化かと思う。

○柴田氏

・　コロナになって改めて気づいたことは、いろいろなところで、知らない人と話をしない、目も合わさないなど、力を合わせるという機会がそもそもなくなってきている。しかし、ラフティングは 1 人でするものではなく、ゴムボートに乗ってみんなで力を合わせて川下りをしようというものである。屋外なので比較的活動も再開がしやすかったということはあり、コロナで知らない人と一緒に何かをするという機会がないということになりつつある中で、ラフティングは川下りしながら共通の体験ができるという貴重なものであると感じる機会が多かった。
・　川ごみついて、リバークリーンをするようになり、いろいろな方と力を合わせていい体験ができると思っている。コロナ禍になった年明け 3 月頃から、時間があるときにリバークリーンの活動をしようということで、コロナ禍でも継続してできた。
・　多摩川では、青梅で流れたごみは羽村に行き、羽村のごみが福生に行くというようにずっとつながっている。コロナ禍で御岳から羽田までの 70km を 5 日間かけてごみ拾いをしながらずっと下ったことがあった。そのときに拾ったごみは最終的に全て青梅のほうに持っていった。川のつながりを考えたときに、青梅、羽村、福生、昭島、羽田まで活動は続けていきたい。

○佐山氏

・　コロナ禍で笑顔がなくなったが、ラフティングで笑顔が見られるようになったと、キーワード的ないい話が聞けたのでとても印象的である。

○寺田氏

・　本セミナーではポジティブな話が聞けたかと思う。コロナという少しゆっくりとした時間の流れが新たな見直しにつながっているということを聞いていて、なるほどと改めて思った。

・　一方、水辺の遊びと学びという部分では、子どもたちの状況が極めて危なくなってきている。「危ないからやっていいのかな」と思ってしまう子どもが増えていると思っていて、そういった子たちが活動を通じて変化していったことがあれば教えていただきたい。

(3)　子どもが水辺の活動を通して変化したこと

○岡本氏

・　私たちの活動場所は干潟でドロドロなので、足がはまって危ないところもある。実際に大師橋のふもとで救急車を呼ばれるということが台風後にたくさん起きた。そういう状況なので十分注意し、最初に足の抜き方を教える。「かかとから上げて抜く」という話をすると、最初は「怖くて干潟に行きたくない」と言っていた子どもたちも、一回はまって抜け出ると、「その辺にしておきなさい」というぐらいまで行ってしまったりなど、自信をつけたら行ってくれたりということが起きる。それで、毎回来てくれる子もいる。

・　そういった子たちは、私たちの活動場所にとどまらず、「こういうことができるところはないか」という質問をし、紹介をすると、「そっちにも行ってみようかな」と広がりができた。

○野沢氏

・　現場の場合は親子連れで来ることが多い。お母さんが見ていて、いつも危ないと言っているのが、「子どもは泥だらけになっても大丈夫なのか」とお母さんが気づいていくことがある。

○佐山氏

・　親も気づくという点では、福生水辺の楽校の釣りは親のほうが熱中されるというように、大人が川での遊びの楽しさに気づくことがある。子どもの頃に川が汚れていてなかなか体験できなかったが、親の世代になって子どもと一緒に遊べたら楽しい川ということを気づいたのかと思う。

○渡部氏

・　12 月はいろいろなつるを使って採取してその場でクリスマスリース作るが、毎年来る方はだいたい一緒で、必ず親と子どもが一緒に来る。親を引きずり込むと、子どもはそれについてきて、見ていると成長も楽しいと思う。うちの息子も幼稚園のときから連れていき、19 歳になるがいまだにスタッフとしてやっているので、親だけでなく、楽しいと思ってもらえれば誰でもいろいろなことに引きずり込めると思っている。

○佐山委員

・　貴重な体験の中で、時系列でもつながって何年後かにスタッフとして関わってくれるというのは大事な話だと思う。

(4)　質疑応答

○感想

・　上中下流での水辺に関係する取組が地域を巻き込んで行われている様子がよくわかった。皆さんの活動に感動、感激した。
・　多摩川の上流から下流までの様子が聞けてとても興味深かった。
・　多摩川という地名を大切にし、いろいろな活動をしていることを知った。

○質問

・　昨今、以前と比較して石積み等が減少して比較的安価なコンクリートブロックの採用が増えているように感じるが、その点についてどう考えているのか。

○櫛原氏（国土交通省 京浜河川事務所）

・　昔は石積みするものが多かった。ただ、石積みするにも職人が手積みで積んでいる。最近は機械施工が主流で、その点で石積みが減ってきたというのは確かである。
・　多摩川の場合は、コンクリートでブロックを作って置いていくというパターンのものが多く、労働力やコストを考えてコンクリートブロックにしているということが実際のところである。

○佐山氏

・　午前中の現場見学はきぬたまあそび村の活動の様子を見ていただくことを中心だったが、コロナ禍でどのように皆さんの活動が変わっていったかという話をする段階で、その前年に台風 19 号があって川の中が汚れてしまったということあり、それがかなりコロナで復活させるのに苦労したという話があった。現場見学で京浜河川事務所から話をしていただいた経緯があって、台風 19 号のときの河川の状況、川づくりを行政の情報として皆さんに提供いただいたということが前段にあってのこの質問かと感じた。

(5)　今後の展望

○岡本氏

・　交流の話がたくさん出ているが、私たちの団体はコロナ禍で活動が減っているという感覚は全くなく、逆に増えているのではないかというくらいに忙しい。

・　私たちはもともと交流がなかったところからコロナをきっかけに増えていっている状況なので、つながりを大切にし、皆さんと力を合わせて川全体の問題を取り組むことができたらうれしい。

○野沢氏

・　皆さんとの話で、ごみ問題が大事な課題になっていることが改めてわかった。ごみ問題は私たちだけではなく、上流から下流まで関係していると感じたので、多摩川全体で考え、どうやって解決していくかをつながりの中で解決策を見つけられればいいと思った。

○上原氏

・　上下流のつながりということが今日のいいキーワードになっていると思った。それと同時に、20 数年活動してきて、子どもたちが成長して多摩川を次の世代につなげていく、そういう子たちを私たちが一緒になって育てていけたらうれしいと思った。

・　コロナ禍でできないことが増えたからこそ活動の価値を感じたこともあった。マイナスのことばかりではないと思うので、ぜひこれから皆さんで一緒に企画を考えていきたい。

○渡部氏

・　私はつなぐ側だが、参加者を増やしていくことや横のつながりを利用して、毎年毎回同じような形で廃れることなく楽しさをずっと伝えていきたい。

・　小さい子どもを「福生に水辺の楽校があるからおいで」と呼び込み、多摩川はこんなに楽しい、面白いということを少しでも伝えて次の世代にバトンタッチしたい。

○柴田氏

・　今日は自分が知らなかった多摩川の話を実際にフィールドに行って見ることができ、いろいろな活動をしている方がいるということが顔を見てわかった。多摩川は歴史がすごくあるが、知らずにずっと多摩川で活動してきたので、これから学んでいきたい。

・　団体としては、選手やスタッフも力を合わせて活動する、ゴールに向けて頑張るということが、選手たちのその後の生活にプラスに働いていくような機会を作っていきたい。

・　年間半分くらいは多摩川の川の上にいる。多摩川で楽しく豊かになる経験をしたので、恩返しをしていかないといけない。ラフティングはリバークリーンをするのにいいので、下流の羽田空港まできれいにしたいと思っている。

・　川がきれいで、川でたくさんの人が楽しんでいる、水遊びをしている状況はすごくいい社会だと思う。多摩川がきれいになり、それに誇りを持つ人が多い世の中になったらすごくいい。そのように貢献ができたら、ラフティングというスポーツの価値が上がるのではないかと考えている。

○寺田氏

・　「つながり」ということが１つ大きなキーワードと思いながら、つながりによって、子どもの遊びと学びはどう変わってくるのだろうというところに立ち返ってくると思う。
・　つながりができることで子どもたちの学びの場が広がっていく。それは大人自身が学び取り、楽しいと思って広げていくからこそなし遂げられるものだと思う。
・　川という場所はいろいろな楽しさを感じ取ることができる、そういった場をつなげていく役割を皆さんは持っている。皆さんの団体がない場所の子どもたちは川とつながることができない。「知ることより感じることのほうが大切である、知ることは感じることの半分ぐらいだ」ということをレイチェル・カーソンが言っている。その感じ取ることができる場というのを作り出していくためには、もっとつながり、そして大人自身が広げていくことが必要である。

○神谷委員長

・　私自身も今日初めて聞く話がたくさんあってとてもいい勉強になった。多摩川では本当にたくさんの方々の活動があると知っていたが、まだまだ知らないことばかりで、皆さん本当にすばらしい活動だと思った。
・　いつもは私がコーディネーターをやることが多かったが、今回は若手に入れ替えた。登壇者の顔ぶれも女性と男性と３人ずつで、今までのコメントは偉い先生の堅い話が多かったなど、これまでのセミナーの形式を変えていく１つの試みとなった。
・　最初にお話しした流域懇談会の話で、“夢”ビジョンというものは、ぱっと見るとありきたりなことを書いてあるように見えるが、実は長い多摩川の活動の振り返りを全てまとめたうえで、なおかつこれからのビジョンとして掲げたものなのである。
・　表紙に「次世代を担う子どもたちのために…」とあって、中を開くと、「「多摩川の未来」を想像し、実現しようとする取り組み、それが「“夢”ビジョン」です」とあって、さらに全体を開くと、「多摩川をつなぐ」「世代をつなぐ」「流域をつなぐ」「ひとをつなぐ」ということで、本当にこれが大テーマである。
・　今日のキーワードである「つながり」ということで、これは多摩川だけではなく、どこに行っても同じだと思う。具体的にそれがどのようなことなのか、どうすればいいのかということが今日の皆さんのお話でよくわかった。

7.　閉会挨拶（京浜河川事務所 櫛原氏）

櫛原氏

京浜河川事務所の櫛原氏より閉会の挨拶をいただき、第 57 回多摩川流域セミナーを閉会としました。

＜主な内容＞

- 午前中にはきぬたまあそび村の現場視察、午後には各上流から下流までのリレートーク、トークセッションをしていただいた。
- コロナで活動が思うようにできない中、オンラインで調整が出来るようになったことが非常に大きい。
- 多摩川流域懇談会は多摩川らしさを次世代の子どもたちにちゃんと残すということが目的なので、今後も応援していただきたい。